

多胎児支援の現状と課題

服部律子 堀内寛子 藤迫奈々重 清水智美 兼子真理子 (大学)
川上登紀子 里見芳子 (岐阜市北保健センター) 大法啓子 (県立岐阜病院)

I はじめに

近年不妊治療の普及に伴って、全国的に双子・三つ子をはじめとする多胎児出産は、増加している。1950～70年代には、双子の出産は、出産千に対して、6.1～6.4程度であったが、1980年代後半より、年々上昇を続け1998年では9.4となった。双胎妊娠はハイリスク妊娠として位置付けられ、妊娠中の異常の発生率も単胎の妊娠に比べると高く、妊娠中毒症は20～30%、早産は42.2%であるといわれている。また双胎の周産期死亡率も高率であり、1980～1991年では出生千に対し双胎では46であり、単胎の5～6倍である。

岐阜県においても、同様に、多胎児の出産は、1998年では双子207組、三つ子3組と増加している。

わが国の多胎児支援においては、1968年より天羽幸子氏により「ツインマザーズクラブ」が創立され、母親主体の支援活動のさきがけとなって、多胎児の育児サークルの開催や会報の発行などの実践を行ってきた歴史がある。近年の多胎児の増加とともに、行政においても、少子化対策の一環として多胎児育児支援活動に力点が置かれてきているが(金田1991 服部1998)、地域で活動に差が見られ、すべての多胎児の家族が参加できるわけではない。多胎児を産み育てる母親や家族には多くの課題があり、特に心理社会的な問題に対する看護介入に関する研究は不十分で今後の実践が期待される場所である。

岐阜県でも多胎児の支援活動は、最近活発に行われるようになってきた。しかし、県内の多胎児出生数に関しては、地域による差が大きく、人口が少なく高齢化の進む地域では、育児支援そのものが、難しい状況にある。多胎児を産み育てる家族への医療福祉の充実は、一般の育児支援や障害児など特別なニーズをもつ子ども達への支援活動にも、繋がっていく事が期待される。

今回岐阜県内の多胎児の育児支援状況を調査し、支援活動の実態と活動が抱えている問題、また今後の課題と方向性について検討したので報告する。

II 岐阜県内の多胎児の育児支援調査

1. 調査対象と方法

調査対象は、岐阜県内の保健センターや役場などで保健師が常駐し、地域看護活動を行っている99市町村と県内の保健所8ヶ所である。調査内容は、多胎児の年間出産数、多胎児の育児支援状況、育児支援で困っていること、多胎児の新生児訪問の状況などである。調査は郵送にて行った。

さらに育児サークルについて、母親の意見や、保健センターでサポートしている保健師の意見を聞くため、電話により聞き取り調査を実施した。

2. 岐阜県内の多胎児支援の現状

回答のあった市町村は84(84%)、保健所は4(50%)であった。

1) 多胎児の年間出産数

表1は管轄の地域で出産する年間の多胎児(主に双子)の数である。年間8組以上の市町村は7(8.3%)であった。年間3組以下が65(77.4%)であった。80%近くの地域で、年間の多胎児出産数は3組以下であり、多胎児の出産が少数であるが広範囲にわたっている。

	度数	生数 %
0～1人	45	53.6
2～3人	20	23.8
4～5人	7	8.3
6～7人	5	5.9
8～9人	1	1.2
10人以上	6	7.1
合計	84	100

2) 多胎児サークルへの支援

多胎児サークルへの支援をしている地域は10の市町村(11.9%)であった。

3) 多胎児サークルの現状

今回の調査で把握できた、多胎児サークルは12であった(そのうち1つは休会中)。

表2にその概要を示した。今回の質問紙調査と電話による調査で明らかになったものだけである。

12のサークルのうち、双子の母親が立ち上げたサークルは7であり、保健師が準備して立ち上げたサークルは4、母親と保健センターが共同したものは1であった

表3は各市町村の多胎児サークル支援についての考えである。多胎児の出産が少ないため、サークルを立ち上げることは考えていない、という意見が多かった。

3. 岐阜県内の多胎児支援の課題

岐阜県内の多胎児支援の課題を寄せられた回答の自由記載から分析した。分析方法は、一文章に一つの意味をもつように文脈にそって分け、データ化した。それぞれのデータを意味内容により分類した結果、4つの課題があげられた。表4に具体的な内容を示した。

- 1) 出生数が少ないことによる援助の難しさ
- 2) 住民主体のサークル支援
- 3) 公的支援の充実
- 4) 障害児のいる家族やサークルに参加しない家族への援助
- 5) 専門性の育成

4. 多胎児の育児支援の今後の方向性

- 1) サークルのネットワークをつくり、サークル間の情報交換をする

サークルをはじめた母親たちは、他のお母さんたちがどうしているか、お話ししたいという自分達のニーズがあって、集まってみようということになる場合が多いのだが、サークルとして発展していくことになると、どのような方法をとればよいかわからないことも多い。前述したように、母親主体のサークルであっても、その運営にはいろいろな問題もかかえており、またサークル活動についての経験や知識もない事が多く、サークルの将来に不安も感じている。リーダーや中心メンバーが集まって、相互の交流をはかり、他のサークルの経験から、自分達のサークルに生かせる情報が得られると心強いであろう。

またいくつかのサークルが集まると、広い地域で交流会ができ、講演会やリサイクルなどの行事が計画できる。ネットワークで繋がれば、一つのサークルではできなかった内容の活動ができ、県内に仲間の輪も広がると考えられる。多胎児の育児支援を求める声は行政に住民の声として新たな施策を起すことになることが期待できる。

2) 多胎児支援のための専門家の研修

市町村の保健師活動は多岐にわたり、母子保健に多くの人手を割くことができないかもしれない。しかし、多胎児の家族ケアは障害児を持つ家族へのケアと同様に、一般的な周産期や育児の知識では十分ではなく、家族に必要な情報は提供できない。また多胎児など特別なニーズをもった母子へのケアについては、従来の看護教育では対応できていない。より専門性の要求される分野については、現職の研修制度など卒後の継続教育が望まれる。

多胎児については、妊娠から出産育児の特徴と多胎児特有の育児相談に関して、保健師が、母親のニーズに満足の行く対応ができるように、研究の機会を持ち、他の地域での経験を交換しより認識を深めていくことがよいと考える。

表3 多胎児サークルについての考え

項目	数	%
多胎児が少ないため立ち上げない	51	(60.7)
サークルを立ち上げたいが人的経済的余裕がない	9	(10.71)
母親や家族からの要望が少ない	13	(15.48)
多胎児の保健指導について、十分な知識がない	9	(10.71)
その他	15	(17.86)

III 双子の母親の育児の実態

1. 調査対象と内容

調査対象は、岐阜県内のO病院とG病院で出産した双胎の母親172名および、G病院で出産した単胎の母親171名(有効回答は双胎88名51.2%、単胎91名53.2%)であった。児の月齢は2か月～36か月であった。

調査内容は、双子の母親の育児と健康状態、今まで受けた保健サービスへの評価である

対象となった、母親の平均年齢は32.4歳、父親の平均年齢は34.6歳であった。児の出生体重と在胎週数には双胎と単胎に有意な差が認められた(表5)。

表5 対象の概要

	双胎 平均 SD	単胎 平均 SD
母親の年齢（歳）	32.4±3.9	32.3±3.5
父親の年齢（歳）	34.6±4.4	35.1±4.9
在胎週数（週）	35.4±2.7	38.6±1.6
出生体重（g）	2180±550	3039±415
児の月齢（月）	18.4±1.1	16.6±0.9

保健指導については、双胎、単胎とも妊娠中の意志の指導には、約8割が満足していた。また妊娠中の看護師助産師の指導についても8割以上が満足していた。しかし、保健センターの指導については、双胎では満足しているものは、35%であり、単胎に比べて有意に少なかった。

育児サークルについては、育児サークルに入っている人は、双胎22%、単胎30%であった。育児サークルに入りたいか？という問いには双胎のほうが多く、60%の人が入りたいと答えていた。

双胎では、妊娠中から十分な情報が伝わりにくく、特に地域での妊娠中から育児期までの指導が必要であり、サークルの紹介なども必要である。

討論

- * 双子は最近しているが、指導が十分できているとはいえない。病棟でも双子のためのパンフレットを作る予定である。今後は双胎のための指導に力を入れていきたいと思う（病棟助産師）。
- * 双子を育てているときは、本当に大変で、周りをみても双子がいなかったのどう育てればいいのかわからなかった。サークルなどあればよかったし、双子の情報は何でも欲しかった（双子の母親で看護師）
- * 双子のサークルをサポートするのは、難しい。年により担当が替わるので、対応が違う事もある。母親の代表と十分連絡を取り合う事が必要である（保健師）

表2 岐阜県内の多胎児サークル

サークル名	主な地域	連絡先	活動内容	保健センターの関わり
ツインズ・スーパー ツインズ親の会	岐阜市周辺	北保健福祉センター 岐阜市保健所 など	月3回 会報の発行、座談会中心 年に数回、リサイクル・歯科医師などの 講演会・子どものための劇団招待など	月1度は保健師が出席。育児相談な ど。
ニコニコチェリーキ ッズ	本巣郡（本巣町・北 方町・巣南町・真正 町・糸貫町など）	本巣町 各町役場など	月2回は本巣町、月1回は巣南町で開 催。0～3歳の多胎児が中心。毎回15組 程度出席。座談会中心。年2回ほどリサ イクル市を開催（土曜日）。H8年度よ り。	母親が立ち上げたサークル。保健師 活動には関与していない。母子健康 手帳交付時や新生児訪問時にパン フレットを渡してサークルの紹介 をする。
ふたごっち	可児市	中濃保健所可 児市保健セン ターなど	月1回の交流会。座談会や気候のよい時 にはピクニックなど。H12年度より。	立ち上げには保健師が支援。その後 は母親のみ。
みど・ふぁど	多治見市・可児市・瑞 浪市など	多治見市保健 センター	会報の発行。集会では講演会やクリスマ ス会など	保健師は関与していない。
ツインズクラブ	関市・美濃市・各務 原市・岐阜市・武芸 川町など	関市保健セン ターなど	月1回の交流会。10～15組程度参加。 座談会や講習会。また希望者で食事会な ど。H12年度より。	保健センターが中心となり昨年発 足。まだ母親の代表者が決まってい ない
双子の会（仮）	岐南町・柳津町・羽 島市・岐阜市など	岐南町役場	月1回の交流会。10～15組程度参加。 座談会。クリスマス会など。H12年度 より。	特に保健センターは関与していな いが、双子の親に紹介をしている程 度。
ツインズ	高山市	高山市保健セ ンター	2ヶ月に一度の交流会。H11年度より。	サークルの立ち上げに県の衛生専 門学校の学生とともに保健師がか かわった。年に一度は保健センター で交流会をする。母子手帳交付時や 新生児訪問の時にサークルの紹介 をしている。
ツインズクラブ	垂井町・大垣市など	垂井町保健セ ンター	2ヶ月に一度の交流会。表佐地区公民館 を使用。 絵本の読み聞かせやリズム体操などを 時々している。H10年度より。	保健師は活動には関与していない。 母子手帳交付時に紹介をしている。
さくらんぼ会	瑞浪市	瑞浪市保健セ ンター	3～4ヶ月に一度の交流会。H12年度よ り。	保健センターでサークルを立ち上 げた。活動は母親中心。今は場所の 設定について支援をしている。
ほのぼのさくらんぼ 育児のつどい	白鳥町	白鳥町保健セ ンター	H13年度に1回交流会をもつ。今後母 親から希望があれば開催する予定。	保健センターの保健師が、交流会を 企画した。
ふたごのぐりとぐら	中津川市	中津川市保健 センター・児童 館	月2回の交流会。H13年度より。	児童館で母親たちが自主的に作っ たサークルで、保健センターは紹介 のみ。
双子交流会（仮）	金山町	金山町保健セ ンター	今まで2回集まったが現在は休会中。	保健師は活動には関与していない。

表4 岐阜県内の多胎児支援の課題

1) 出生数が少ないことによる援助の難しさ

- ・もし出生があっても、当町だけでは支援は難しいし、同じ方々の情報がない。郡や保健所単位など広域で行っていく必要があると思う。どこにどのようなサークル、団体があるかその時は、情報提供していきたいと思う。
- ・町内者に限定すると、人数が少なすぎて心配な部分がある。今回当町では広域（郡内）サークルからの部分的な集まりとして育ちそうだが、1組の欠席が会に与える影響が大きく定期的に続けていくには不安がある。
- ・何分にしても、数が少ない。年に1組あるかないかと、サークルまでは無理。
- ・多胎児の出生が少ないので仲間作りは町内だけではできない。また、保健所管内での育児サークルも少し遠いのでなかなか参加しづらい。
- ・多胎児の出生が少なく、仲間作りをとも考えても近くにはいない。
- ・出生数が少なく、1つの町だけでサークルを作ることは難しかった。
- ・県内全体で利用できること、情報交換や交流ができる援助組織（家族の会のようなもの）があるとよい。
- ・ここ2~3年は多胎児の出生がなく、出生があっても年に1組程度の為、母が同じように子育てをしている母と話をする相手がいない。その為、母のニードにあった育児支援ができていない
- ・保健所管内位の単位での、公的な多胎児サークルがあれば活用したいという要望がある。
- ・多胎児のケースは年に1~2組くらいなのでサークルの立ち上げは迷うところである。
- ・将来広域になり、多胎児が多くなり要望があれば支援していきたいと思っている。
- ・多胎児のみを対象とした育児サークルを1つ町で立ち上げるには限界がある。
- ・1~2年に1組あるかないかで、子どもの年齢も違い難しい。
- ・多胎の年間出生数が少ないので多胎児のみにサークルが立ち上げられない。
- ・年間に1組の出生しかない（ここ2~3年は0組）為、立ち上げる予定はない。しかし県内（飛騨地区）での多胎児の育児サークルの情報が入手できれば、サークルを母などに紹介していきたいと思っている。

2) 住民主体のサークル支援

- ・サークル活動につなげたいが皆さん余裕がなく、交流会にとどまっている。中心となって活動してくれそうな人が1名のみなのでサークルとなるとその方の不安が大きく長期的な活動が困難となる。
- ・保護者（母親）が積極的にサークル活動に参加したいと思ったり、参加できる状態にあるのは就園までというケースが多い。（子育てを考えると、就学や思春期など子どもが成長していく中では困ることも多そうなのだが・・・）母親参加のみでなく「親の会」的な会の育成が必要なのではないかと考えるのだが・・・
- ・保健師としてのサポートのあり方。参加している方又多胎児を持つ家族が育児支援としてどんなことを希望しているか、今後親の会がどのようになっていくとよいと考えているか、担当として現在や把握できていない。このあたりを踏まえ、どのようなサポートをしていくとよいか、考えなければいけないと感じている。
- ・多胎児まで手は回っていません。どうやったら、住民主体のサークルができるのか？
- ・行政が主体となるより、親が主体で行なったほうが、ユニークに活動できるのではないかと。

3) 公的支援の充実

- ・多胎児をもつ家族、特に核家族では、一時的に多くのお金や、支援が必要となる。保健センターからの訪問指導だけではなんともならないことが多い。ベビーシッターや保育所、入浴サービスなどで一部負担して頂ける制度の充実を望んでいる
- ・サポートするためのマンパワー、情報、環境等の資源不足
- ・多胎児の母親が健診などで外出する時、周りの手助けする人が必要である。育児ボランティアを自由に活用できるようになればいいと思う。
- ・交流会に参加したくても、できない方もあり外出の援助者や、先輩ママの訪問（保健師同行）などで支援できるとよいが・・・
- ・日常の育児をお手伝いするボランティアやサポートシステムがあると良い
- ・地域に、一時預かり等のサービスがないため、母のニーズに答えられない。
- ・核家族など、他の家族の育児の協力が得られない時のための、公的な育児支援サポートがない。（例えば、1人の子が病気になったときに、もう1人を見てくれる人がいないことなど）
- ・現在の育児サポート事業は、子どもの年齢が1歳以上だったり制限が多い。

4) 障害児のいる家族やサークルに参加しない家族への援助

- ・多胎児の場合、障害の発生のリスクが高く、出生した児に障害があった場合、育児サークルに出席するまでの気持ちの整理をするまでに、時間がかかる様である。
- ・障害がある児の親への援助

5) 専門性の育成

- ・実際の指導の内容が、わからず（勉強不足なのですが・・・）困ると思う。同時に2人を育てるうえでの悩みなども、把握しきれない状況
- ・情報も発達している（双胎の本も出ている）為、特にないが母親等育児者に対するメンタルサポートについて頭を困らせている。無理に介入してよいのか、求められたらよいのか分からない。
- ・育児支援は多胎児の数が少ないので勉強不足と情報不足で適切な指導ができない。
- ・多胎児の親にアドバイスできるほどの知識と情報がほしい。
- ・多胎児の出産数が少ないので、どのようなことで困っているのかなど、指導についての十分な知識がない
- ・多胎児の出産があった時に、どう育児支援をして行くか、前もって勉強が必要だと思う。
- ・多胎児の持つ色々なニーズに対応できるよう保健師が専門知識を深める必要があると思う。
- ・ニーズが把握されていない。